

大宮という地名は、格式の高い武蔵国一の宮・氷川神社を「大いなる宮居」とあがめたことが由来といわれています。現在、大宮公園がある場所は、もともとアカマツや萩・ススキなどの原生林に覆われ、古代から氷川神社の「杜」でした。

明治に入ると、欧化政策を推進する政府は欧米のような公園を設置しようと、寺社の整理統合も兼ねて各地の旧寺社領の大部分を官有地としました。氷川神社境内地も、旧社領 8 万余坪(27 万 6000 m<sup>2</sup>)のうち、約 6 万余坪(19 万 8000 m<sup>2</sup>)が官有地となり、1885(明治 18)年 9 月に公園として開園します。当時の正式名称は「氷川公園」でしたが、「大宮公園」とも呼ばれていました。開園後、昭和の初期にかけて、東京や近郊から多くの人々が来園する公園として人気を集めました。その中には多くの文学者も含まれており、彼らの筆によって、大宮公園は作品の舞台としても様々に表現されてきました。



『江戸名所図会』より「大宮駅氷川明神社」1836(天保 8)年 (さいたま文学館所蔵)

参考文献

- 『大宮市史』第 4 巻 大宮市市役所 1982 年
- 『大宮文学散歩—ふるさとの面影—』大宮市立大宮西部図書館/編  
大宮市教育委員会 1991 年
- 『企画展 大宮公園と文学者たち』さいたま文学館 1999 年
- 『古地図を楽しむ』埼玉県立文書館/編 埼玉新聞社 2008 年
- 『企画展 氷川神社と大宮公園 展示解説書』埼玉県立歴史と民俗の博物館 2015 年

2021 年 9 月 7 日  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1  
電話 048-643-3701



# 作家たちがみた大宮

## (1)大宮公園と文学者たち

2021 年 9 月 7 日(火)~11 月 4 日(土)

1	書籍	『墨汁一滴』 正岡子規 著 1982(昭和 57)年刊行・14 刷 岩波書店	
2	新聞(写真)	「日本」 明治 34 年 6 月 16 日	国立国会図書館
3	冊子(写真)	『寒山落木』第 1 巻 正岡子規 筆 1898(明治 31)年	国立国会図書館
4	書籍	『漱石全集 第 25 巻』 夏目金之助 著 1996(平成 8)年刊行・初版 岩波書店 掲載文「正岡子規」	
5	雑誌(写真)	「ホトギス」 1908(明治 41)年 9 月号 ほととぎす発行所	国立国会図書館
6	絵葉書(写真)	「中山道大宮氷川公園萬松樓其七廣間」	武蔵一宮氷川神社
7	書籍	『荷風全集』第 1 巻 永井壯吉 著 1971(昭和 46)年刊行・2 刷 岩波書店 掲載文「野心」	
8	書籍(写真)	『野心』 永井荷風 著 1902(明治 35)年刊行・初版 美育社	さいたま文学館
9	書籍	『荷風全集』第 4 巻 永井壯吉 著 1971(昭和 46)年刊行・2 刷 岩波書店 掲載文「歓楽」	
10	雑誌(写真)	「新小説」第 14 年第 7 巻 1909(明治 42)年 7 月 春陽堂	国立国会図書館
11	書籍	『青年 改版』 森鷗外 著 2017(平成 29)年刊行・初版 岩波書店	
12	書籍(写真)	『青年』 森鷗外 著 1913(大正 2)年刊行・初版 昶山書店	さいたま文学館
13	雑誌(写真)	「スバル」 1910(明治 43)年 5 月号 昶発行所	さいたま文学館
14	書籍(写真)	『一日の行楽 東京近郊』 田山花袋 著 1923(大正 12)年刊行 博文館	さいたま文学館
15	書籍	『寺田寅彦全集』第 2 巻 寺田寅彦 著 1937(昭和 12)年刊行・初版 岩波書店 掲載文「写生紀行」	
16	雑誌(写真)	雑誌「中央公論」 1922(大正 11)年新年号 中央公論社	国立国会図書館
17	地図(写真)	「大宮町全図」 1933(昭和 8)年 埼玉県立文書館所蔵 埼玉県行政文書 昭 5832-4	埼玉県立文書館
18	書籍	『武蔵野探勝』 高浜虚子 編 1972(昭和 47)年刊行・2 刷 有峰書店	
19	書籍(写真)	『武蔵野探勝』 高浜虚子 編 1942(昭和 17)年刊行・初版 甲鳥書林	さいたま文学館
20	書籍	『人間失格 名著初版本復刻太宰治文学館』28 巻 太宰治 著 1992(平成 4)年刊行 日本近代文学館	
21	写真	「太宰治が通院していた時の宇治病院」	医療法人宇治病院

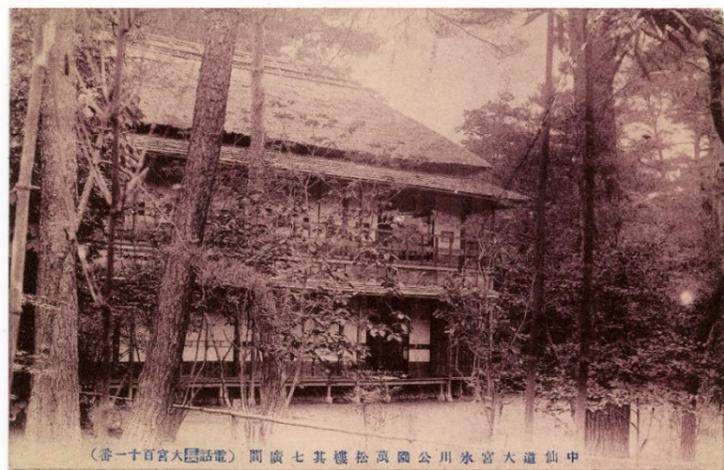
所蔵欄に記載がないものは、大宮図書館所蔵です

1 正岡子規「墨汁一滴」・夏目漱石「正岡子規」

明治

1891(明治 24)年秋、帝国大学(現・東京大学)国文科に在学中の正岡子規は、学年試験の勉強のため、大宮公園内の旅館・万松楼に10日ほど滞在しました。子規は、「万松楼といふ宿屋へ往てこに泊って見たが松林の中にあつて静かな涼しい処で意外と善い」と随筆『墨汁一滴』に書いており、自選句集「寒山落木」に次の句を載せています。

大宮氷川公園 ふみこんで帰る道なし萩の原  
氷川公園万松楼 ぬれて戻る犬の背にもこぼれ萩



絵葉書「中山道大宮氷川公園萬松楼其七廣間」(No.7)  
明治末期から大正初期ごろ撮影(武蔵一宮氷川神社所蔵)

また、子規はこの時、友人の夏目漱石も呼び出し、漱石も2日ほど万松楼に宿泊しました。漱石は、手紙でいきなり呼びつけられたことが思い出深かったのか、雑誌「ホトギス」明治41年9月号の子規七回忌特集に「正岡子規」という題で回想文を寄せています。そこでは、万松楼での子規の様子を、「大将奥座敷にて陣取って威張っている」と書いています。

2 永井荷風「野心」・「歓楽」・森鷗外「青年」

明治

大宮公園は文学者が訪れただけでなく、小説の舞台にもなりました。耽美派の代表的作家とされる永井荷風は、1902(明治 35)年に発表した初期の小説『野心』のなかで、主人公が大宮公園に滞在中に、経営する会社が放火されたことを知る場面を書いています。

また、1909(明治 42)年に発表された「歓楽」では、詩人の主人公が自殺する前に作品を書き上げる場所として大宮公園を登場させています。



絵葉書「官弊大社氷川公園の秋色」 明治から大正ころ撮影(さいたま市立博物館蔵)  
『青年』では「社の東側の沼の畔に出た(中略)「好い処ですね」と、覚えず純一が云った」と話すシーンがある

一方、森鷗外は雑誌「スバル」で1910(明治 43)年5月号から連載を始めた小説「青年」のなかに、主人公とその友人が女性論や人生論を語り合う舞台として、初冬の大宮公園を設定しています。それぞれ作品には、ともに明治末期の公園風景が描かれています。荷風や鷗外も取材のため大宮公園を訪れていたのでしょう。

3 田山花袋「東京近郊 一日の行楽」・寺田寅彦「写生紀行」

大正

大正時代になると、田山花袋と寺田寅彦が、随筆のなかで当時の大宮公園の様子を書いています。

花袋は1920(大正 9)年に発表した『東京近郊 一日の行楽』のなかで、大宮公園を「静かな好い處だ」と評し、当時公園内の旅館では、螢を土産として渡していたことなどを書いています。

寅彦は、1921(大正 10)年10月15日から11月10日にかけて埼玉・東京の各地へスケッチ旅行をしました。大宮を訪れた際には、園内を探索したり、旗亭という店で食事をしたことを随筆「写生紀行」のなかで書いています。「静かで落ち着いて大変気持ちよかった」と、その閑静さを褒める一方、旗亭の女中から、林学者・本多静六らによる公園の改良計画がすすめられ、園内の料亭は立退きを迫られていることを聞いたとも書いています。



写真「大正6年の大宮公園」(さいたま市所蔵)

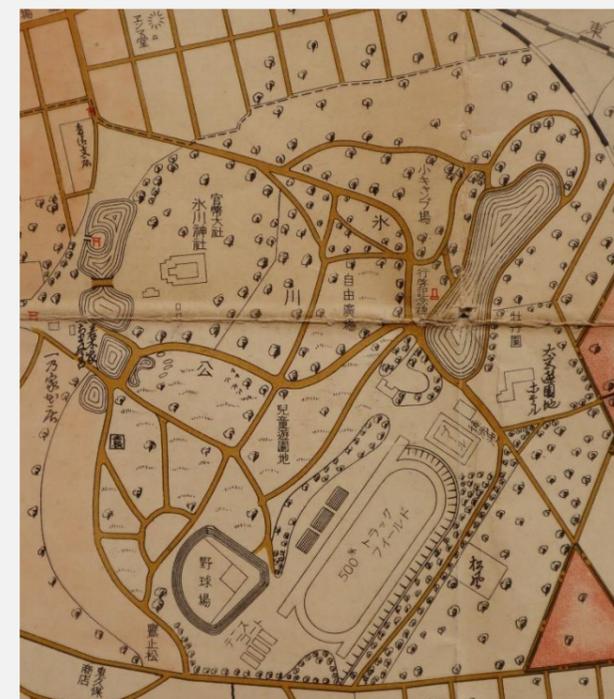
4 高浜虚子「武蔵野探勝」・太宰治「人間失格」

昭和

子規の同郷で「ホトギス」の編集発行人となる高浜虚子は、「ホトギス」の同人らと武蔵野の面影を求めて、武蔵野探勝句会を開催します。

1930(昭和 5)年から始まった句会は計100回開催され、第10回目は1933(昭和 8)年1月29日に大宮公園で行われました。この句会で虚子は、雪が残る公園内で4句を詠んでいます。また、虚子の弟子である赤星水竹居は、完成しつつある運動場のスタンドを見て、明治神宮外苑のようであったと書いています。

『人間失格』の執筆が上手く進まず、静かな場所を求めていた太宰治は、1948(昭和 23)年、筑摩書房創業者の吉田晁に勧められ、大宮公園近くの大門町にある民家に14日間ほど滞在します。執筆中はほとんど部屋から出ることがなかった太宰ですが、氷川参道近くにあった銭湯・松の湯や宇治病院に通い、近辺を散策したそうです。太宰はこの大宮滞在中に、『人間失格』の「第三の手記」後半と「あとがき」を書き、作品を完成させました。



「大宮町全図」埼玉県立文書館所蔵 埼玉県行政文書  
昭 5832-4 より抜粋 (No.17)  
(埼玉県立文書館所蔵)